

Episode 5

EDITING

「自分のこだわりはリズムです」

「シーンとなった後、どういいう音楽が流れるのかになって、ああいうワーツで感じて」



CD 読後感としては、テレビドラマを見たような感覚で、すごくよくできてます。テンポ感がすごかった。

宮原 テンポ感ってロケ当日は見えなかったんです。いざ編集しようと画面で見たとき、ここ必要だなんてつないでいったら、ああいうテンポ感になったというか。最初、普通につないでみたら尺は7分でした。そこから余計なものをそぎ落としていった感じですよ。

CD 予告編みたいなものもあれば見たいですね。それだけの深みがあります。

シュ 制作する上で、宮原さんがこだわっているところを教えてください。
宮原 自分は、脚本やストーリーテリングが弱いんですが、岡戸君はそこがとて強くて、上手く強みを生かし合っていてやりたいと思ってます。そこで自分がこだわりたいのは、リズムです。自分には色々とルーツがあって、その一つが音楽をやっていたことなんです。バンドでドラムを演奏していたので、何事にもですけど、リズムが一番気になる。

CD そのせいか、つなぎが上手いと思ったのは。
宮原 最後に弾みをつけさせるといいます。理想は、血が通うぐらいのリズムを作りたい。具体的なリズムに限らず、間とかを作るのも好きで、そこも詰めたいと思います。そこですね、自分のこだわりはリズムです。

シュ 「TOO MATCH」は、音楽にもすごくこだわってますね。
宮原 音楽は自分のモチベーションになっているところがあって、自分の好きな音楽を入れないとテンションが上がらない(笑)今回も、エンディング曲の「SUNNY DAYS」を最初から決めていて。

岡戸 そうそう。あの曲が最初に決まっていた。
宮原 シーンとなった後に、どういいう音楽が流れるのかなって考えていたら、ああいうワーツで感じて。

岡戸 あれいいです。ワーツで終わってくれるから、気まずいオチなんだけど、どんよりせずに終われる。

宮原 曲名も「SUNNY DAYS」でポップでいいなって。
シュ マユミの登場シーンから流れる「THIS COUNTRY IS TORTURE」も、ドラムのビートが心地良くて、「よっ」でセリフがラッスみたいに聞こえました。

宮原 劇中曲に関してはずっと考えていました。あまりドラマチックにしてもダメですし、強すぎるのもオーバーになるかなと思って。なんか、すごくシュールな感じがいいなって、あれになりました。グルーヴィーというか、テンポが良くて、あの曲で組み立てていきました。

シュ この曲に決めたのはいつですか？

宮原 編集の時です。音楽に絵をはめてみたら、シュールだなって。

岡戸 そういう音楽的な感覚は、全部宮原君に任せていましたね。

宮原 音楽は楽しいんですけど、めっちゃ苦労しましたね。

岡戸 最初の曲でしょ？

シュ アイが登場するシーンで流れた？

宮原 カズヒデがロマンチックになる

シーンです。曲名も…

岡戸 「SUMMER OF LOVE」(笑)

宮原 ぴったりだなと。曲調もメロデー、童貞の女性に対する浮遊感みたいなものがあって、すごくいいなと思いました。

シュ 苦労したところは？

宮原 あの雰囲気曲を、どこに入れて、どこで切るかって、試行錯誤でした。
岡戸 マユミのセリフでカットアウトするか、そこからやあおおおってフェードアウトしていくのかとか。

宮原 そこはめっちゃやったよね。
岡戸 絵は宮原君がいじって、音はMAの松隈さんが調整して…すごいなと。

シュ タイミングですね。

岡戸 絵をもうワンフレーム早く切るから、そこから音入れてって…フレーム単位でやるんだって。

宮原 目の動きと手の動きとを、いかに曲とシンクロさせるというか、上手くダンスさせるかっていうのをすごく考えていて。

シュ 絵は変えられないから、音で調整するしかないということですか？

宮原 自分は逆。音に絵をいかに合わせていくかなんです。ここが一番使いたい部分なんだけど、音楽的にはここに入れ込まないといけなとか。

シュ まず、音楽の流れを決めてしまうと。

宮原 それじゃやっぱり、編集作業が一番楽しかったんじゃないですか？

宮原 楽しかったですね。



「自分は逆。音に絵をいかに合わせていくか」